

城内を縦断していること、築山古墳を利用してのことである。この他、虎口や「櫓台」等についても、氏の長年の研究成果に基づいて非常にレベルの高い考察が加えられている。

以上に見てきたように、本書の「高屋城」の部分は、様々な側面から高屋城を解明し、単なる調査報告書の域を出た優れた著作物であると評価される。しかし、いくつか不満の残る点もある。

その一つは、『撰津高槻城』の報告書〔史林〕六八一で小島道裕氏が紹介）がそうであったように、本調査報告が孤立気味なことである。特に細張りや古市との関係等については、他の戦国期城郭（城下町）とのより一層の比較検討がなされるべきであろう。

次に細かい点ではあるが、土塁の断ち割りのトレンチを入れたにもかかわらず、土塁の構造そのものへの言及が殆どなかった点である。筆者は現地説明会の当日、土塁の断ち割り面に明確な版築の跡を見出したし、当日説明にあられた市教委の方もそのことを詳しく説明されていた。城郭という武士の社会生活のための空間の中で、恐

らく労役に駆り出された民衆のものであろう数少ない「いとなみ」の痕跡に触れないのはいかがなものであろうか。

しかし、それらにも増して怒りさえ覚えるのは、本調査で報告された遺構が殆どすべてもはや存在しないことである。これは勿論本書への直接の不満ではないが、敢えてここで一言申し述べておきたい。本書では、「調査の契機と経過」の項の中で、市長や文化庁初め様々な機関の責任者が現場を見学し、現地見学会には何百人もの人々が集まり、各種の団体が保存の要望を声明したことを記した後、ただの二行、「その後、府・市・申請者の三者で協議を行なった結果、土塁をすべて削平して平坦にし、平面の遺構には支障のないように工事を行なうことになった。また、史跡化は実現しなかつた」（傍点筆者）、と述べるのみである。公式の報告書では、或るいは多くを語れなかつたのかもしれない。しかし、大阪府下の平野部では殆ど唯一残る大規模な戦国期城郭遺構、しかもその歴史的重要性において屈指のものである高屋城の遺跡は、この開発破壊によって中心部分の殆どを失ったのである。

開発と保存の問題は一朝一夕には解決できぬ事柄である。だが、本書は、こうして詳細に記録された重要な遺構がもはや地上に存在しない、という点において、この問題に新たな一石を投ずるものとなる。我々としては、行政の怠慢を責めると共に、学術研究や保存運動に対する自らのかわりを敲しく見直してゆく必要がある。

（今谷明「河内高屋城の近況と保存問題」〔『日本歴史』四〇一、一九八一年〕参照）
へなお、本書には他に、古市大溝、野中寺、切戸1号墳・2号墳の調査報告も収められている。

（A4版、二〇〇頁、原色図版八頁、
図版二八頁、一九八五年三月、羽曳野
市教育委員会、三〇〇頁）

（仁木宏 京都大学大学院生

中村廣治郎編

『イスラム・思想の営み』

本書は、思想、歴史、社会、文化の面から総合的にイスラムというものをとらえ直してみようとする『講座イスラム』全四巻の第一巻として出版され、主にイスラムの思想的展開を扱ったものである。イスラ

ム思想史の分野において、我々はすでに個人の手によって書かれた優れた概説書、例えば井筒俊彦氏による『イスラーム思想史』『イスラーム文化』、本書の編者中村氏による『イスラーム——思想と歴史——』をもっている。とすれば、編集書である本書のメットは、思想家達や分派に専門化しつつある諸研究の最先端の成果を知り得ると共に、それらの諸研究がイスラーム思想史の展開の中にどのように位置づけられるかを知り得ることではなければならない。おおむね、その試みは成功しているように思われる。

まず、後藤晃氏による第一章「アラブ文化とイスラーム」では、イスラーム発生の地であるアラビア半島および初期の担手アラブ民族の文化がイスラームの中に残した刻印を鋭く指摘する。それは後に民族を越えた普遍的宗教思想となっていくイスラームを研究していく場合に、しばしば忘れられがちであるが、しかし極めて重要な要素である。また、アラビア半島におけるイスラームの発生を説明する過程で後藤氏が使われた「地中海世界に広まった一神教革命」なる概念も注目すべきである。この考えに従うならば、イスラームは四世紀から進行していくユ

ダヤ教、キリスト教による地中海世界の一神教化の最終的な段階と考えられ、この「一神教革命」は「さまざまな豊かな古代文明を抹殺」していったのである。

小田淑子氏による第二章「コーランの思想」第三章「法と共同体」では、まず、人間の救済論の立場に立ち、コーランの思想の中から共同体志向型という宗教特質を導き出し、それがイスラーム法シャリーアとして結実し、イスラーム共同体「ウンマ」をつくりだしていったということが、歴史的な経過にはふれず思想的展開として述べられている。共同体志向型というイスラームの特質をコーランにおける救済論の展開として把握しようとした試み。

松本耿郎氏による第四章「イスラームの神学と哲学」では、イスラーム圏に流入したギリシア哲学が、独自の発展をとげながら、その過程において、まさにスコラ哲学と呼ぶうるムータジラ神学の発生をうながし、そこからアンジュアリーを経てオーソドックスのスンナ派神学が形成されていく過程が述べられている。従来のイスラーム哲学・神学史の概説の水準を出ないが、六節において哲学とシューア派神学との関係が述べられ

ていることが注目に値いしよう。

編者中村氏による第五章「スーフイズムの確立——ガザリーの生涯と思想を中心として——」では、初期からイスラームの中に伏在した神秘主義スーフイズムがガザリーによって初めて正統イスラーム信仰の中にとり入れられ、従来の神学の中に新しい重要な位置を与えられ取り入れられていったことが、ガザリーの生涯と思想の両面の記述によって語られる。共同体志向の古典的イスラームからスーフイズムの個人型の中世イスラームへの転換を完成させたのがガザリーであったという中村氏の従来からの主張がコンパクトにまとめられている。竹下政孝氏による第六章「後期スーフイズムの発展——イブン・アラビーを中心として——」では、一二世紀以後のスーフイズムの発展が扱われ、特に各地で発生したスーフイー教団及びその重要な信仰形態である聖者崇拜の問題が中心として取り上げられる。聖者崇拜はスーフイズムの大衆化にとって最も大きな問題の一つであるが、竹下氏がイブン・アラビーの思想の中から聖者の理念的形態を抽出されたことは特筆に値する。イブン・アラビーの思想全体及

びルーミーの生涯と思想については概略の域を出ないが、我々はすでにナスル『イスラームの哲学者たち』（黒田寿郎・柏木英彦訳）、井筒俊彦『イスラーム哲学の原像』、ジャラルルッディーン・ルーミー『ルーミー語録』（井筒俊彦訳）においてその大要を知っている。それゆえに、竹下氏は聖者崇拜の問題にしばって論述し、また従来あまりスペースをさかれなかったイブン・アラビの各地域における影響についてやや詳しく触れられたのは正しい方針であったと思う。

鎌田繁氏による第七章「シーア派の発展——モッラー・サドラーを中心として——」では、前半部でシーア派の発生、その独自の法学思想の発展が述べられ、後半はサフアビー朝イランで活躍したモッラー・サドラーの独自の思想の概略が書かれる。我々は井筒氏の翻訳によってモッラー・サドラー『存在認識の道』をもっていたといえ、彼の思想全般にわたる日本語による概説を初めてもつことになった。ただ、残念なことにモッラー・サドラーの思想がなぜシーア派思想の発展の中に位置づけられるのかがわからない。

湯川武氏による終章「イスラム改革思想の流れ——ハンバル派小史——」では、哲学、神学、スーフイズムなどの諸派によるイスラム解釈をすべて異端としてしりぞけ、ムハンマドと彼の教友達の時代の原初イスラム、すなわち各派の思弁による理論化が行われる以前のイスラムを理想とするイスラム・ファンダメンタリズムの歴史を扱う。氏はイブン・ハンバル、イブン・タイミーヤ、ラシード・リダーの思想、ワッハブ運動、サダト暗殺によって知られた「ジハード団」を全て、この思想というよりかむしろ保守主義とでも呼びうる流れの中にとらえようとしている。イスラムの歴史において、この我々の目には頑迷としか写らぬ保守主義が常に存在し続け、現代においてもなお歴史の表面に浮び上ってくるという湯川氏の指摘はイスラム思想の流れにおいて各派のはなばなしの思想的展開にのみ注目することに對する警告とも受けとめられよう。

各章の末尾に簡単な文献紹介がつけられている他に、全体を通した項目別の文献案内、人名・書名と事項の二つの索引がつけられていて参照に便利である。

さて、本書の特色であるが、まず第一にシーア派についての記述が比較的多いこと。イラン革命の影響かもしれないが、現在の日本のイスラム思想史研究の最も弱い部分にも目を向けようとする姿勢がうかがわれる。

第二に、従来の思想史の概説に比べて、ガザリー以降すなわち中村氏の言う共同体型のイスラムが個人型の中世イスラムへ転換してからの記述が格段に増えている。これに照明学派のスフラワルデー、シーア派のトゥーシー、イブン・ハルドゥーン

の記述が加われれば後期イスラム思想史の大きなポイントはほぼおさえられるのではないかとさえ思わせる。後期イスラム思想史研究が日本において着実に進歩していることを感じさせる。

編集書であることによる欠点、例えば各章の記述の密度が非常に違っていることなど、はいくつか指摘されよう。しかし、そんなことよりも、編者の優れた指導力によるところが大であろうが複数の研究者が各自のテーマをもって執筆し、なおかつイスラム思想史として読むにたえうる本書ができあがったということは日本のイスラム研究

にとつて実に喜ばしいことである。また『講座イスラム』の他の三巻の出版が待たれるところである。

(四六判 二五六頁 一九八五年九月
筑摩書房 二〇〇〇円)
川本正知 京都大学文学部羽田記念館
教務補佐員)

昭和六十年年度科学研究費補助金(研究成果刊行費)の交付について

このたび、昭和六十年年度科学研究費補助金(研究成果刊行費)を、文部省学術国際局より交付されました。

昭和六十年四月一日から、昭和六十一年三月三十一日までの史林の出版・刊行に対する補助金です。ここに史林の出版・刊行費の一部として、文部省科学研究費補助金(研究成果刊行費)の交付をうけたことを明記いたします。

受贈図書

(一九八六年一月八日)
二月二十八日)

村岡健次・川北稔編著 イギリス近代史
(ミネルヴァ書房)

川勝義雄著 中国人の歴史意識(平凡社)

国史談話会雑誌(東北大学国史談話会)

二六

立命館産業社会論集(立命館産業社会学

会) 二一—三

海事史研究(日本海事史学会) 四二

鹿児島大学史学科報告(鹿児島大学教養

部) 三二

文献ジャーナル(富士短期大学出版部)

一九八五—二

富士論叢(富士短期大学出版部) 三〇—

二

史朋(史朋同人) 二二

東京商船大学研究報告 三六

奈良史学(奈良大学史学会) 三

文学会史(山口大学) 三六

人文論叢(福岡大学総合研究所) 一七—

三

編集後記

爛漫の春となりました。遅くなりましたが、69巻第2号をお届け致します。今回は、論説二本をはじめ、ノート、書評と西洋史関係の論稿が中心となりましたが、東洋史・現代史からも力作が寄せられております。充分御検討ください。

ところで、最近投稿が減少気味のため毎号の編集もやや難行しております。会員の皆様からの積極的な御投稿を切望する次第です。

尚、永年編集委員を務められた伊谷銅造・吉田敏弘両氏が此度交替されることになりました。御尽力に感謝致します。

(最古参となった元)

一九八六年二月二五日印刷 定価一〇〇〇円

一九八六年三月一日発行 送料五〇〇円

史林 第六九巻第二号(通巻第三三六号)

発行人 史学研究会

振替京都七一一五五番
理事長 水津一朗

印刷所 中村印刷株式会社